様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６１７００４

研究課題名（和文）「多文化都市チェルノヴィッツの社会と文化」研究

研究課題名（英文）A study on society and history of the multicultural city Czernowitz

研究代表者
藤野　寛（FUJINO, HIROSHI）

一橋大学・言語社会研究科・教授

研究者番号：５０２９５４４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：かつてチェルノヴィッツという街があった。1918年に第一次世界大戦が終結し、オーストリア帝国が崩壊するまで、この帝国の一地方都市だった。オーストリア領だったので、ドイツ語文化が支配していたが、ドイツ人より多くのウクライナ人、ルーマニア人が住んでいた。それ以上に、多くのユダヤ人が暮らしていた。歴史上、ドイツ-ユダヤ文化が真に実現していた街があったとすれば、それはチェルノヴィッツだ、とすら言われる。しかし、1918年以降はこの街はルーマニア、ソ連、ウクライナと属する国を替え、今日、多文化都市の面影を見出すことは難しい。本研究がこの街の過去とその文化へのオマージュとならざるをえない所以である。

研究成果の概要（英文）：Once there was a city named Czernowitz. Until the end of the First World War and the collapse of Austria-Hungary in 1918, Czernowitz had been a part of the Austro-Hungarian Empire, thereby dominated by the German language and culture. In spite of this, the German population was outnumbered by the Ukrainian and Romanian population, and furthermore, there were a larger number of Jewish people living in the city too. Therefore, if German-Jewish Symbiosis ever did exist, we could perhaps say that it had taken place in Czernowitz. However, since 1918, Czernowitz was ruled successively by Romania, the Soviet, and Ukraine from 1991 onwards, the city commonly known as Chernivtsi nowadays has already lost its characteristic as a multicultural society. It is therefore one of the objectives of this study to pay homage to the past culture of Czernowitz.

研究分野：哲学（倫理学）、思想史

キーワード：多文化共生　オーストリア帝国　ナータン・ビルンバウム　カール・エーミル・フランツォース　ウクライナ　シオニズム　イディッシュ語　同化

１．研究開始当初の背景

1775 年から 1944 年にかけて、神聖ローマ帝国・ハプスブルグ帝国・オーストリア／ハンガリー二重帝国のほぼ東の端に、歴史上、唯一にして随一と言ってよい仕方で、多文化共生、とりわけドイツ文化とユダヤ文化の共生を実現し、その後、1989 年までほぼ約 45 年間歴史からすっかり姿を消し、1989 年のソビエト崩壊、1991 年のウクライナ独立とともにウクライナの一都市としてこの世界に蘇ったチェルノヴィッツという街がある。

この「多文化都市チェルノヴィッツの社会と文化」をテーマとする研究に取り組みたいと思うに至った経緯には、二つの背景があった。

第一に、1994 年以来、私が研究の中心に置いてきた、フランクフルト学派の文化理論との取り組みである。フランクフルト学派第一世代は、例外なくユダヤ人知識人だったが、その事実は、彼らの文化理論にも影を落とさずにはすまなかった。例えば、「非同一性」を鍵概念としてすすめられたアドルノの思索は、「異なるものが不安を抱くことなく共存できる」状態をこそユートピアとして描き出すものであり、近年の「多文化社会」をめぐる議論を先取りするものと見なされうる。

第二に、フランクフルト学派の哲学との取り組みを通して、私は精神分析学の創始者ジークムント・フロイトに関心を抱くところとなり、『フロイト全集』（岩波書店）の翻訳にも参加した。フロイトは 19 世紀後半から 20 世紀前半に、オーストリアの首都ウィーンに生きた人だが、彼が生きたオ－ストリアは今日われわれが知るオーストリアとは根本的に異なる国だった。それは、ドイツ民族が、12 とも 13 とも言われる他民族を支配する巨大な「帝国」だったのであり、その結果、首都ウィーンは言うに及ばず、帝国のあちこちに、複数の民族が共生する多文化都市が出現することになった。プラハしかり、ブダペストしかり、トリエステしかり。

そして、本研究が主題としたチェルノヴィッツもまた、そのような多文化都市だった。その際、ドイツ文化とユダヤ文化の共生がとりわけ注目に値する。ある研究者に言わせれば、「ドイツとユダヤの共生は、それがそもそもどこかに存在したとすれば、まさにチェルノヴィッツでこそ、辛うじて一世紀の間成功していた」のである。

２．研究の目的

本研究は、「多文化共生」の理念をかつて極めてユニークな仕方で実現したとされるチェルノヴィッツ（チェルニウツィ）の街の歴史と現在に学問的な光をあてることを目的としたものである。ただし、それは、久しく困難な　―　ほとんど不可能な　―　課題だった。というのも、1944 年から 1989 年までの約半世紀の間、チェルノヴィッツはソ連に属して、外部から遮断された状態にあり、ロシア人の町として、かつてのチェルノヴィッツとはおよそ異なる存在様態を強いられていたからである。

しかし、1991 年以降、チェルノヴィッツは独立国家ウクライナの街となり、今日そこでは、かつてのチェルノヴィッツの歴史を再発見しそこに接続しようとする努力が、精力的に繰り広げられている。そのことは、この 24 年間に出版されたチェルノヴィッツに関連する書物（やＤＶＤ）の量的膨大さに如実に現われている。量だけではない。質的にも、かつて存在したチェルノヴィッツの社会と文化の興味深さにふさわしく、学問的関心を刺激せずにはすまない研究が多数現われている。パウル・ツェラン、ローザ・アウスレンダー、ヴィルヘルム・ライヒ、エルヴィン・シャルガフ　―　チェルノヴィッツ生まれの芸術家と学者の名前を挙げるだけでも、この町の文化がどれほどの創造性と魅力をたたえるものであったかが理解できよう。

チェルノヴィッツ研究のチャンスがようやく到来したと言えるのだが、この研究は、単なる歴史研究にとどまるものでは決してない。一つに、昨今世界的課題となっている「多文化共生」にとって、この街の歴史が得がたいモデルを提供している、ということがある。加えて、これはヨーロッパの経験だった。ＥＵに代表される現在のヨーロッパ統合の試みについて考える上でも、かつて「よりすぐりのヨーロッパの街」だったチェルノヴィッツの経験は、重要な参照項となるに違いないのである。

３．研究の方法

本研究が「歴史と現在」を問うものであることから、二つのアプローチが考えられる。まず第一に、文献の収集、解読、解釈の作業である。前述のように、1991 年にウクライナ領となってこのかた、チェルノヴィッツの歴史に関する書籍、研究論文が続々と刊行されている。

同時に、チェルノヴィッツ研究は、オーストリア帝国史を大枠として、そのコンテクストの中で進められる必要がある。したがって、過去に刊行された書籍や研究論文を参照することもまた不可欠であり、その意味でも、チェルノヴィッツ大学のオーストリア文庫や、ウィーンの国立図書館、大学図書館における資料収集、その解読・解釈が、本研究の主要な作業となることは間違いない。

第二に、チェルノヴィッツの「現在」への接近のためには、何よりもまず、現地に足を運びそこに身を置くことが大前提となる。言うなれば、時間的なそれと平行して、地理的距離を縮める努力もまた不可欠なのである。

その上で、可能であれば、今なお存命のチェルノヴィッツ在住ユダヤ人の方々へのインタヴュー調査を行いたいとの思いを心に

温めつつ、本研究に着手した。

４．研究成果

本研究は、今から 100 年前の多文化都市の歴史と文化への関心を主要動機とするものであったが、私が最優先課題としたのは、現在ではウクライナに属する都市となっているチェルノヴィッツ現地に足を運び、そこに身を置き、研究対象の現実をこの目で見、肌で感じることにあった。（そもそも、チェルノヴィッツに行くことができるのかどうかさえわからない中で、本研究は始められたのだった。）

その際、カール・エーミル・フランツォースの「ウィーンからチェルノヴィッツへ」と題するエッセイに深く魅了されたことが私をこのテーマへと駆り立てた、という事情があったので、フランツォースが 140 年前にしたのと同じ汽車の旅をして、チェルノヴィッツにたどり着きたいと考えた。そして、2012 年の夏、ウィーンからチェルノヴィッツへの汽車の旅が実現したのであるが、それは予想以上に容易であると同時に困難なものだった。オーストリア帝国時代、ウィーンからチェルノヴィッツへの旅は国内旅行だった。汽車で約 20 時間を要したという。ところが、今日では、それはウクライナという外国への国外旅行であり、しかもそこにたどり着くには、南回りだとハンガリー（とルーマニア）を、北回りだとチェコとポーランドを経由しなければならない。ただし、ハンガリー、チェコ、ポーランド、ルーマニアはいずれもＥＵに加盟しており、ヴィザ取得の必要はなく、さらにウクライナも、ＥＵに加盟してはいないが、シェンゲン協定に準じて、90 日以内の滞在であれば、ヴィザなしに入国できる。その面では、胸をなでおろすことになったのだが、３ヶ国、あるいは４ヶ国にまたがる移動であることもあって、汽車の接続が恐ろしく悪い。また、ウクライナ国境におけるパスポート・コントロールに膨大な時間がかかり、結局、ウィーンからチェルノヴィッツへの旅に 30 時間以上を要することになった。

私は、ウクライナ語もロシア語も学んでおらず、ドイツ語を理解する研究者とコンタクトを取ることをめざして、チェルノヴィッツ大学を訪れたのだが、幸いにも、チェルノヴィッツ大学で歴史学を講じておられる上に当地の「ユダヤ博物館」の館長でもあられるミュコラ・クシュニール教授と面識を得ることができ、チェルノヴィッツの歴史と現在について、核心に迫る議論を交わす機会に恵まれた。

さらに、チェルノヴィッツ大学の図書館には、1992 年以来「オーストリア文庫」が存在し、11000 点を超える書籍、新聞、雑誌、ＤＶＤ、ＣＤが収蔵されている。資料収集に連日足を運ぶことができ、その点で、望外の収穫であった。

2012 年の秋、私が所属する一橋大学大学院言語社会研究科にウクライナ出身の留学生がおられることを伝え聞いた。連絡を取ってみると、彼女（以下、Ｐさん）は御自身はキエフ出身だが、父はチェルノヴィッツ生まれで、祖母と叔母は現在もチェルノヴィッツ在住であることが判明した。Ｐさん自身、子供の頃、長期休暇を何度もチェルノヴィッツの祖母のもとで過ごしたという。私が、2013 年の夏の休暇を利用して、調査のために再度チェルノヴィッツを訪れる計画でいることを伝えると、Ｐさんは、祖母を訪問する目的でチェルノヴィッツに赴き、その際、私のインタヴュー調査に通訳として協力してもよいと申し出てくださった。それだけではない、現実に 7 人のチェルノヴィッツ在住の方々へのインタヴューが可能となったのだが、その人選から連絡まで、すべてＰさんの尽力の結果実現したものだった。この 7 人の中には 2 人のユダヤ人も含まれており、チェルノヴィッツのシナゴーグでおこなわれたそのインタヴューは深く記憶にとどめられるものとなった。

2014 年の夏も、三度、チェルノヴィッツを訪れ、チェルノヴィッツ大学とそのオーストリア文庫で資料収集に専念する予定だったが、この年の 2 月以降のウクライナの政治情勢の悪化のため、その計画は断念し、ウィーンで国立図書館と大学図書館に収蔵されている資料を収集するとともに、その解読作業に専念して時を過ごすことになった。また、チェルノヴィッツ大学でドイツ語を教えておられる哲学研究者で思想史家の Benjamin Grilj 氏と面談し、チェルノヴィッツの現状と本研究の意義をめぐって率直な意見交換をすることが出来た。

最後に、この三年間の研究によって新たに得られた知見をまとめておきたい。

まず、1944 年から 1991 年のソ連時代におけるチェルノヴィッツ在住ユダヤ人の状況について、それまで私が囚われていた根本的な誤解に気づき、その修正が迫られた、ということがある。1944 年の時点で、この町は、ユダヤ人が皆無の街と化していた、というイメージを私は抱いていた。しかし、このイメージは誤っている。現実には、第二次大戦終結とともに、かつてこの街に住んだ多くのユダヤ人が帰還した。のみならず、新たにこの街を住まいとして選ぶユダヤ人も少なくなかったのである。ウクライナという国にあって南西部に位置するこの街は気候面でも温暖であり、かつ、西洋文化の面影を色濃く残す点で、住むに魅力ある街なのであって、廃墟のようにイメージすることは誤りであった。とはいえ、全体として反ユダヤ主義的であったとは言えないソ連時代にあっても、西洋社会の通例として、ユダヤ人迫害の波が押し寄せる期間は 1944 年以降にもあったのであり、そういう理由もあって、とりわけペレストロイカ以降、国外移住が容易になる条件

下で大半のユダヤ人住民はイスラエルやアメリカ合衆国への移住という選択肢を選び、現在チェルノヴィッツに住むユダヤ人は1000人に満たず、それも大半が高齢者であるという。この街のユダヤ文化が完全に消滅するのは時間の問題である、と言わねばならないのであるが、しかし、それは、1944年に既にそうだった、という話ではないのである。

第二に、オーストリア帝国におけるユダヤ人の運命という問題を考える上で、第一次世界大戦に帰せられる意味の重大さ、ということに気づかされた。ほんの二～三ヶ月後には、当然オーストリア側の勝利のうちに終結するとの楽観とともに始まったこの大戦は、実際には4年を越えて続き、泥沼化していったわけだが、ある時点から、多くの人々は、オーストリア側の敗北ということをリアルな可能性として考えざるをえなくなっていったに違いない。そして、その敗北とは、帝国の解体、多数の国民国家の独立を意味するものだった。

そして、オーストリア帝国の解体こそは－例えばチェコ人にとっては独立国家の誕生を意味するが故に慶賀されるべき事態でもあったのだろうが　－　ちょうどその反対に、ユダヤ人にとってはカタストロフィー以外の何ものでもなかったのだ。シオニズムを最初に提唱したナータン・ビルンバウムが、ほどなくこの立場を捨て、「ディアスポラのユダヤ人」の立場に転じたのは、帝国の解体が眼前に迫るのを肌で感じざるをえない状況にあって、シオニズムはほんの一握りのユダヤ人にとっての選択肢でしかありえず、大半のヨーロッパのユダヤ人にとって何らの解決策ともなりえないことを認識せずにはいられなかったからであろう。その際、ビルンバウムにとっては、2年に及んだチェルノヴィッツ在住の経験が、大きな意味を持ったのではないか。ユダヤ・ナショナリズムという解決とは異なる可能性を示唆する経験として。

オーストリア帝国という体制は、そこに生きるユダヤ人にとって何を意味したのか、この大きな問いの枠組みの中で、チェルノヴィッツ研究は推し進められねばならない。自明とも言えるこの認識を手に、私は、本研究の最終目標である『かつてチェルノヴィッツという街があった』と題する著作の執筆にいよいよ着手したいと考えている。2015年の夏季休暇中の課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 藤野寛、新たなる経験としての反復、という逆説 - キルケゴール「不安」論のコンテクスト、I.R.S.- ジャック・ラカン研究、査読無、No.12、2014、16-37

② 藤野寛、トーマス・ネーゲルの価値論 - 価値の客観性について、言語社会、査読無、第8号、2014、87-105

③ 藤野寛、主観性／客観性をめぐる二つの思考 - キルケゴール生誕２００年に寄せて、思想、査読無、no.1069、2013、2-6

④ 藤野寛、「チェルノヴィッツ」考 - 歴史と言語、思想、査読無、no.1067、2013、52-74

〔学会発表〕（計４件）

① 藤野寛、1915年のキルケゴール、現代倫理学研究会、2015年3月7日、専修大学（東京都・千代田区）

② Hiroshi Fujino, Wiederholung als seine neue Erfahrung - ein Paradox, Kierkegaard-Symposion, 2.8.2014, Hildesheim(Deutschland)

③ 藤野寛、キルケゴールの人と生 - ヨアキム・ガルフ『ＳＡＫ』を読んで、「現代思想の源泉としてのキルケゴール - 生誕200周年記念ワークショップ」、2013年11月29日、高崎経済大学（群馬県・高崎市）

〔図書〕（計３件）

① 藤野寛、越智博美、河野真太郎、中井亜佐子、鵜飼哲、中山徹、他7名、彩流社、ジェンダーにおける「承認」と「再分配」、2015、317頁（17-39頁）

② 藤野寛、岩波書店、キルケゴール - 美と倫理のはざまに立つ哲学、2014、286

③ 藤野寛、三浦玲一、早坂静、越智博美、河野真太郎、中井亜佐子、中山徹、他7名、ジェンダーと「自由」 - 理論、リベラリズム、クィア、彩流社、2013、334頁（13-36頁）

６．研究組織

(1)研究代表者

藤野 寛（FUJINO, HIROSHI）
一橋大学・言語社会研究科・教授
研究者番号：５０２９５４４０